



Contents

全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1」開講にあたり
「全学共通初年次教育セミナー2014」開催 2

連載 部科校における学習支援等の事例紹介 3

第5回 **【歯学部】「特別研究」を通して、広い視野を持った歯科医師を養成**

連載 授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供

第6回 **法学部における初年次教育の試み**

TOPICS /// **「日本大学 学生FD CHAmmit 2014」開催** 4

COVER PHOTO

商学部のゼミナールで「マネジメントゲーム」を行っている様子。参加者それぞれが、社長となって材料の仕入れや製造・販売、販売競争などを疑似体験。「企業経営」「会計」について、ゲームを通して実践的に学ぶ。(担当教員：商学部教授 川野克典)

全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1」開講にあたり 「全学共通初年次教育セミナー2014」開催

平成26年12月25日、日本大学会館において、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1」の教育目的・学修教育目標等の理解と、今後の展開に資することを目的としたセミナーが開かれました。

「自主創造の基礎1」は、全学共通初年次教育科目として、平成26年度から各学部で順次、開講されています。今回のセミナーは、同授業科目の推進を担当する各学部の教職員63人を対象に、学部内でその役割を果たせるようになるための知識、態度、技能を身につける研修として行われました。

開会挨拶では、大塚吉兵衛学長が、「初年次教育の重要性を、先生方は十分に理解されていると思う。1年生のうちに大学の学習スタイルに慣れ、友達や教員との人間関係を築くことは、その後の大学生活に大きく影響する。また、文章力や自己表現力などは、卒業後も必要な力であり、専門分野を問わず、この『自主創造の基礎1』でしっかり教育してほしい」と述べられました。

◎資料と動画による予習を課す

今回、参加者には、セミナーの1週間前に、「自主創造の基礎1」の授業内容を記したガイドライン、および「自主創造の基礎1」の一部の授業で導入予定の「反転授業」について説明した動画をメールで配布し、事前に熟読・視聴するように伝えられました。そのように予習を課したこともあり、セミナーの冒頭では、「自主創造の基礎1」に関する4つの質問が出され、参加者がクリッカーで回答するミニテストを行いました。ここでは正解を伝えず、次に行われた「自主創造の基礎1」の趣旨説明において答えが分かるという形式が採られました。

続いて、「反転授業」について、学務委員会全学共通初年次教育検討ワーキンググループメンバーの伊藤芳久教授（薬学部）が、自身が専門教育科目で行っている手法を題材に解説しました。授業の進め方、学生への効果、課題など、実体験を基にした話に、参加者は動画で予習したことを確認するように、うなずきながら聞いていました。伊藤教授は、「反

転授業は、学生が事前準備をしない」と成立しない。教員と学生双方の意識改革が必要だ」と、全学共通で1年生に対して反転授業を行う課題を強調しました。

◎ガイドラインをグループワークで修正

メインプログラムのワークショップは、学部混合の7～8人ずつの8グループに、タスクフォースが1人ずつ付きました。課題は2つあり、最初に全グループの共通課題として、「全学共通初年次教育科目実施に向けての問題点と対策について」をテーマに議論。各自が付箋に課題を書き、KJ法を用いて抽出していききました。



各グループにボードを設置。1つめの課題は、KJ法を用いて、模造紙に課題を整理していく。

2つめの課題は、グループ別に設定され、「自主創造の基礎1」の第1週～第7週、第15週の授業におけるGIO（一般目標）、SBOs（到達目標）、方略、評価をブラッシュアップ。各グループが1週分を担当し、目標に掲げられている内容や文言は学生にとって適切か、授業の進め方に改善点はないかなどを検討しました。



2つめの課題は、ガイドラインに直接修正を加えながら、議論を進めた。

まとめのグループ発表では、最初のグループ共通課題について、どのグループも「学生への動機づけ」「教員のモチベーション」「授業の運営」などを挙げ、課題意識は共通していることがうかがえました。「自主創造が抽象的なので、もっと分かりやすい言葉で表現することが必要」「ファシリテーター養成セミナーの開催」などの対策案や、「各学部で授業を実践して出た課題を共有し、解決策を大学全体で考えることが必要だ」という考えも示されました。

2つめの課題については、「学生に分かりにくい言葉遣いではないか」「設定目標が高い」「1回の授業に対して内容が多い」といった指摘があり、修正案が出されました。



各グループの発表では、「自主創造の基礎1」の実施に際して出てきた期待、不安、疑問が率直に述べられた。

このように、多くの問題点が指摘されましたが、参加者からは、「議論を通して『自主創造の基礎1』を全学で行う意義を改めて理解した」という声が聞かれました。

学務委員会全学共通初年次教育検討ワーキンググループリーダーの永塚史孝教授（国際関係学部）は、「予習を課し、アクティブ・ラーニング型のセミナーにしたため、参加者は2つの課題について積極的に考えられたようだ。参加者が各学部でファシリテーターとなり、現場の教員に初年次教育への理解を広めていくことを期待したい」と、大きな成果を感じていました。

連載

部科校における学習支援等の事例紹介

第5回【歯学部】「特別研究」を通して、広い視野を持った歯科医師を養成

歯学部では、患者の心を理解するためには広い視野が必要だと考え、全人的な教育を進めています。その代表的な科目が、3年次前期に行う「特別研究 (Approaches to Basic Research)」です。それまでに学んできた知識の統合を図ることを狙いとしています。

授業は、指導教員が掲げる約50



少人数グループで研究成果をまとめる。

のテーマのうち、各自が興味のあるテーマについて問題点を見出し、自己学習を行う形式を取っています。この授業に備え、1年次にはプレゼンテーションや表計算のソフトウェアの活用を、2年次にはプレゼンテーションの仕方を学ぶカリキュラムになっています。

歯科医師国家試験合格に向けた取り組みとしては、チューター教員が、少人数の学生を一定期間、継続して個別に学習指導するチュートリアル形式の教育を行っています。その指導には、ティーチング・アシスタント (TA) も加わり、学習面だけでなく、人間関係や生活の悩み

など、精神面も支援しています。近年、精神的に弱い学生が増え、一度、自信をなくしてしまうとなかなか立ち直れない学生もいます。そこで、学生同士が励まし合い、仲間意識を醸成するため、クラブ活動への参加を勧めています。「同級生の横の繋がりだけでなく、先輩・後輩の縦の絆を深めることが、学習行動の支援になると考えている」と、歯学部附属歯科病院長の宮崎真至教授は説明します。

学年を超えた絆で結ばれた学生たちは、早朝や放課後、自主的に集まり国家試験対策などの学習に取り組んでいます。

連載

授業改善のための
ティーチングティップスの収集と情報提供

第6回 法学部における初年次教育の試み

5学科ある法学部の中で、政治経済学科は、2008年4月、試行錯誤しながら初年次教育を始めました。前学期の授業では、共通のシラバスを使用し、資料・データの収集方法、著書・論文の読み方、レポートの書き方、図書館の使い方、ディベートの仕方など、大学における学習の基本的なスキルの修得を目的としました。一方、後学期の授業は、担当者それぞれの専門分野に合わせたシラバスとし、専門科目への導入となるような内容にしました。

教学戦略委員会による「第2次中間答申」(2012年9月)を受け、

セメスター制導入とともに、学部共通の初年次教育(必修)の開講を決め、2014年度から、前学期は「自主創造の基礎Ⅰ」として前述の基本的スキルを、後学期は「自主創造の基礎Ⅱ」としてその応用を履修目的に、授業を実施しています。運営の基本方針は、①1時限に配置し、必修の英語(2時限)と抱き合わせにする、②全専任教員が1年おきに担当する、③講義型授業を最小限にし、グループ学習を含むアクティブ・ラーニング(能動的学修)を基本とする、④「自主創造の基礎Ⅰ」は共通の教科書を使用する、としました。

実施初年度を振り返ると様々な課題が見えてきましたが、学生のアンケートには、「論文の書き方や発表の仕方が理解できた」「図書館を利用できるようになった」という声が寄せられました。初年次教育の意義は、十分読み取れたと考えています。(法学部教授 佐渡友哲)



スライドを利用した学生のプレゼンテーションの様子。

TOPICS /// 「日本大学 学生FD CHAmmit 2014」開催

平成26年12月21日、「日本大学 学生FD CHAmmit 2014」が、法学部10号館において開催されました。全学の学生・教員・職員が、学部混合や学部ごとのグループで授業について語り合いました。

イベントの企画・運営は前年度と同様に、全14学部と通信教育部の代表者、計27人で組織された「学生スタッフ」が担当しました。学生スタッフ代表の田仲義典さん（経済学部3年）は、「単発のイベントでは、学生FDは浸透せず、授業改善にはなかなかつながらない。“参加者が学生FDをやりたくなること”を目的に掲げて、メンバー全員でプログラムを練り上げた」と、企画への思いを語りました。

◎「良い授業」とは何かを整理する

今回の参加者は、前回は上回る、学生126人、教員24人、職員24人の計174人。初めての参加者が多いため、FD推進センター長の加藤直人副学長による挨拶の後、まず、学生FDについての説明が行われました。「学生FDの父」と呼ばれる立命館大学共通教育推進機構の木野茂教授と、文理学部学生FDワーキンググループによる「共同企画」として、学生FDは学生が主体となって大学の教育改善をする取り組みであることを、動画、対話や寸劇によって、参加者に分かりやすく伝えました。

メインの「学生参画型企画」では、「良い授業」をテーマに話し合いが行われました。企画運営担当代表の石堂浩暉さん（文理学部2年）は、このテーマを設定した理由について、「授業改善だからと



参加者とスタッフ合わせて211人が集まった。

って悪い点を挙げるのではなく、『良い授業を増やす』という発想になればと考えた」と説明します。

最初に行われた「オール日大ミーティング①」では、学部混合の7～8人がグループとなり、それぞれ所属学部の良い授業を紹介しました。そのようにして他学部の授業を知り、所属学部の授業を見直した上で、次に、同じ学部の学生と教職員が集まって話し合う「学部ミーティング」が行われました。ここでは、「イチオシの授業」をその理由とともにKJ法で分類。良い授業とはどのようなものなのかをまとめていきました。

◎所属学部の授業の良さを熱く発表

模造紙にまとめた結果は、「オール日大ミーティング②」で発表。1グループを2つの班に分け、交互に他学部の発表を聞きに行くMD法で進められました。



「学部ミーティング」の様子。

模造紙には多くの付せんとともに、「実践的」「少人数」「対話型」など、授業の特長を表すキーワードが並べられ、どのグループも所属学部の授業の良さを熱く語っていました。発表終了後は、参加者全員がそれぞれ興味を持った学部や印象に残った学部に投票。最多得票で「CHAmmit賞」に輝いたのは、「芸術学部①」でした。

木野教授は、「今日の話し合いで、学部の学びを振り返ると同時に、卒業までにどのような力をつければよいのかも考えたと思う。その観点からも授業を見つめてほしい」と講評しました。

2016年3月には、全国の大学から学生が集まる「学生FDサミット2016春」が、文理学部キャンパスにて開催される予定で、次回のCHAmmitはその日程に合わせて行われます。



「オール日大ミーティング②」発表の様子。

※本ニュースレターに記載した役職・資格・学年等は、平成27(2015)年3月現在のものです。

日本大学 FD NEWSLETTER 第7号

発行日：平成27(2015)年4月1日[年2回発行] ◎次号は5月発行予定
 発行所：日本大学FD推進センター センター長 加藤直人
 〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 電話:03-5275-8314 FAX:03-5275-8315
 e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-center/
 所管部署：日本大学 本部 学務部学務課
 企画・編集：日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

「日本大学 FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら、学務部学務課(adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp)へお寄せください。
 本ニュースレターに掲載した文章、写真等の無断転載・複製を禁じます。 Copyright(C)Nihon University 2015 All Rights Reserved.